

(試し読み版)

異界オークションで  
落神さまに買われて、  
蕩けるまで契られました

からあげのみこ

一章 # 異界オークション

「ほな続いて——本日を目玉や」

妖しげなざわめきに包まれた拍売場。

半月形の舞台に、ひととき強い照明が落ちる。

淡く、けれど鋭い灯りが、舞台中央の一点を浮かび上がらせた。そこに晒されたのは、一人の女性。

肌に貼りつくほど薄い紗の布を一枚——胸元は危うく、裾は太腿の中ほどで止まり、ほんのわずかな動きでも、見えてしまいそうな見せ物の装いだった。

腕は天井から吊るされた鎖に引かれ、爪先で立つようにして無防備に晒される。

胸元も、裾も、手で押さえることすらできない。

彩乃は、照明の熱に顔を歪めながらも、羞恥と恐怖に目を逸らした。

「年の頃は……二十前半、ちいとばかしとうは立つとりますけどな」

ひらひらと扇子を煽ぐような声音が響く。

舞台の端に立つ拍賣人——名をコヨミという妖狐が、唇の端をつり上げていた。

「けどまあ、人の子としては——なかなかでないして、神性、濃いめ」

その一言で、場がざわめく。

神、妖、物の怪——人外たちの視線が一斉に彩乃に注がれる。ざわり、と空気が揺れる気配に、彩乃は小さく身をすくめた。コヨミは声色を落とし、淡々と、しかし艶めいた口調で言葉を

繼ぐ。

「曰く、遠き巫女の血を引くとか——

曰く、魂の根っこが人にしては、深アいとか。

曰く——名も呼ばれんうちに、この境を踏み越えた、とも」  
天井からの光が彼女の肩を照らす。

その身に宿るなにかを見透かすように、異形たちの目が光る。  
「なにより本来、この異界には、連れて来られるはずのない魂な  
んですわ」

コヨミは舞台の上を見上げ、まるで舞姫でも眺めるように糸目  
をさらに細める。

「——それをや。皆々さま、今宵、買えるんどすえ」

扇子をくるりと回して、コヨミは手をかざした。

「さあ、入札額を。声高う、どうぞ。神格で払うもよし、眷属を

一柱、差し出すもよし——まずは一〇〇万から」

どうして、こんなことになったのだろう。

照明の熱が肌を刺し、張りつく薄布が風に揺れるたび、身体の奥底まで羞恥が這い寄る。

けれど、いちばん焼けつくのは、心の中だった。

直接的な原因は明らかだ。

舞台脇で、飄々と口上を述べるあの妖狐——コヨミ。

彩乃を商品としてこの場に晒した張本人である。

朝はいつも通りだった。

いつも通り、オフィス街の通勤ラッシュに揉まれながら、会社へ向かっていたはずだ。

それが、ふと視界が白く滲んだと思った瞬間。あたりは霧に包まれ、足元のアスファルトは見知らぬ石畳へと変わっていた。

そして——現れたバケモノ。

人とも獣ともつかぬ異形に追われ、命からがら逃げ惑った末、現れたのがコヨミと名乗る妖狐だった。

彼は彩乃を助けてくれた。

そしてその代償を、助けた対価と称して要求してきた。直感的に名前を明かすことは避けたが、それだけでは逃れられなかった。「払えないのなら、身体で返してもろてもかましまへんよ？」

その言葉通り、今、彩乃はこの舞台の上に立たされている。トラックに撥ねられてもいないのに、なんで異界なんかに。しかも、悪徳取引でオークションにかけられるなんて。

これが夢なら、早く覚めてほしい。

けれど、天井から吊られた鎖の重みも、息を潜めて見上げる異形たちの視線も、どれも現実味を帯びている。

（なんなのこの展開は……!?）

彩乃は心の中で叫びながら、再び舞台に注がれる無数の視線に、ただただ身をすくませるしかなかった。

「九〇〇万！」

鋭く飛んだ声に、場がざわついた。

「一〇〇〇万！」

それに被せるように、さらに一声。

コヨミが舞台の端から、客席へと扇子を振った。

「おおっと、大台ですな。ほな、他におりまへんか？」

静けさが場を包む。

値を競っていた声は、そこで止んだ。

いっせんまん。

単位はわからないが、それがとんでもない高額だということだ

けは伝わってきた。

けれど、思考は数字よりもっと切実なところへ向かう。

本当に、自分は売られるのか？

売られたら、どうなるのか。

遅れてやってきた恐怖が、背筋を這い上がっていく。

汗ばんだ掌も、強制的に伸ばされた腕も、ひりつくほど現実的なのに、心だけが宙に浮いていた。

照明の眩しさに目を細めながら、彩乃は必死に客席の様子を窺う。

——見えない。けれど、影は確かにそこにあった。

人の形をしたものは、半分にも満たない。

角を生やした影、獣の頭を持つ者、透けて揺らめく影法師。見るたびに、現実感がどんどん削がれていく。



そして、何より。

どう考えても、雇用契約書が出るタイプの取引ではない。

そもそも、競りだ。

企業でも役所でもない。拍売会——オークションだ。

ここに人道も労基も存在しない。

にもかかわらず確かに今、自分という存在が、値札をつけられ、品定めされている。

恐怖に耐えきれず、彩乃はぎゅっと目を閉じた。

そのときだった。

会場の扉が、乱暴に弾けるように開いた。

音が響いた瞬間、空気が変わった。

視線が一斉に上を向く。舞台から見上げたスロープ式の会場、その一番上。

「一五〇〇万！」

凜とした声が、闇を裂くように響いた。

「おおっとお、飛び入りの旦那から——一五〇〇万、出ましたでえ！」

コヨミが声を上げると同時に、場がざわつく。

「せ、一六〇〇万！」

一拍遅れて飛んだ声は、どこか歯切れが悪い。迷いと戸惑いが滲んでいた。

「二〇〇〇万！」

返す声は真っ直ぐだった。まるで、疑いも逡巡もない刃のよう  
に。

「二〇〇〇万出ました！ 他はありまへんかア？」

あれよという間に二倍に跳ね上がった数字に、場がざわめき立

つ。

闖入者の氣迫と異様な空氣に、神や妖たちの耳がざわりと揺れた。

「飛び込みの旦那、二〇〇〇万でご落札！」  
ざわめきは、野次と囁きに変わっていく。

「誰だ、あれ？」

「落神？」

「ミカゲ……？」

「ミカゲだ」

「落神のミカゲ！」

「なんであいつがここに？」

「ミカゲが、やりやがった！」

「おいミカゲ、払えるのかよ!？」

——ミカゲ。

ざわめきの中、そう呼ばれた男は、赤絨毯の階段を音もなく降りてくる。

誰の声も耳に入れていない。

ただ、まっすぐに、舞台に向かってくる。

「なっ、え？ ……み、ミカゲはん!? ちょ——っ」

会場の端で口を開きかけたコヨミが、糸目を驚愕で見開く。

それでもミカゲは振り向かない。足を止めることもなく、舞台へと上がった。

そして無言のまま、自らの羽織を脱ぐ。

鎖からやっと解かれた彩乃の肩に、静かに、それを掛けた。

見かけの年齢は、彩乃とそう変わらないように思えた。

艶やかな漆黒の髪。滑らかで白い肌には、どこか冷ややかな気

配すら漂う。息をのむほど整った輪郭に、金色の瞳が映える。

その目元は、やや陰が強い。けれど、それもまた彼の纏う凜とした雰囲気と合わさり、俗世の影をどこか遠ざけたよう。この世のものとは思えない、浮世離れた印象を与えていた。

一言でいえば、美しい。

気がつけば、彩乃は呆然と彼の顔を見つめていた。

そして、頬がじわりと熱を帯びていくのを、否応なく自覚した。

「その……」

遠慮がちに紡がれた声に、彩乃ははっと我に返った。

ミカゲが、まっすぐにこちらを見つめている。

その視線に釣られるように自分の姿を見下ろして、ようやく状況を思い出した。

羽織らされた上着の下は、薄布一枚。この距離では完全に透け

ている。外気の冷たさにつんと主張するように固くなった乳首。今さらながらに全身が火照る。

「きゃあっ」

彩乃は慌てて、ミカゲの羽織を胸元にかき寄せた。

頬にこもった熱は、冷めるどころかさらに増していくばかりだった。

「こら、あきまへんな」

ミカゲから受け取った包みを開いたコヨミが中身をひと目見るなり、口元を歪めてつぶやいた。

その声音は先ほどまでの飄々としたものではなく、どこか苦笑めいている。

「えっと、足りないんですか……？」

思わず彩乃が口を挟んだ。

この状況で、自分を買収した男がまさかの未払いとは。あの野次『ミカゲ、お前払えるのかよ!？』が脳裏をよぎる。

「いやあ、量は足りてるんですね。けど……質がねえ」

コヨミは包みの中を器用に指で弾きながら、苦笑を深めた。

「例えるなら……そうやね、銀行持つってても交換してもろえへんような、溶けかけの一円玉。そんなのが、山ほど詰まっとる感じだす」

「……一円玉？」

彩乃は思わず聞き返した。まさか、この神は自分を一円玉の山で買おうとしていたのか。

隣りでミカゲは、まるで石像のように硬直していた。

目を伏せ、何も言わず、ただ静かに——恥じ入るように。

「……五割。おおまけにまけて、五割五分つてとこですな」

どこか愉快げに、けれど淡々と帳簿をめくるような調子で、コミが告げた。

目の前で繰り広げられる取引の意味を掴みかねたまま、彩乃は思わず息を呑む。

「ミカゲはんと僕は、まあ——浅からぬ仲ですさかいな。足りひんぶんは、貸しまひよ」

傍らで静かに立ち尽くすミカゲが、硬い表情のままその申し出に小さく頷いた。

けれど、次の言葉に場の空気がぴんと張り詰める。

「ただし、条件として——その神子、遊郭預かりにさせてもらいます」



「なにを……言っている」

ミカゲの金の目が見開かれ、声にわずかな怒気が混じる。

空気がびり、と音を立てたかのように張りつめた。

しかしコヨミは、まるで涼しい風でも吹いているかのように、煙管を指でくるくると転がしながら言葉を続ける。

「もちろん、他の客を取らせるつもりやおへん。ミカゲはんの専属の“囲い者”として、預からせてもらうだけ。支払いが完了するまでの、仮の措置どす」

＊ ＊ ＊

彩乃は色鮮やかな小袖を身にまとい、御膳に載った料理を前に、座卓越しにミカゲと向かい合う。視線を合わせようとしては逸ら

した。

「えーと、その……ミカゲさま？」

「なんだ？」

短く返され、彩乃は反射的に背筋を伸ばした。

「……聞いてもいいですか？　あの妖狐のコヨミとはどういう関係なんですか？」

聞けば、この遊郭の一角はコヨミの持ち物らしく、預かりという形にされたのもその一存だ。

「……子狐の頃から知っている。それだけだ」

「え、じゃあ幼なじみみたいなの……？」

「そう呼ぶには、互いの年齢が離れすぎているな」

そっけなく返され、彩乃は少し肩をすくめる。彩乃から見れば、どちらもせいぜい自分より年上に見えるかどうかという程度だ

が、何せ相手は神や妖。年齢の尺度すらまともに測れない世界だ。見た目の印象などあてにならないことは、もう理解している。

今朝は通勤電車で揺られながら、スマホでネット小説を読んでいた。

それを思い返すと、今の自分のあまりの適応力の高さは異世界転生主人公顔負けだ。ショックで麻痺しているだけなのかも知れないが。

向かいに座るミカゲが静かに料理に箸をつける。それにならつて、まずは汁物をひと口。

——美味しい。

米も炊きたてで、つやつやと輝いて甘みがある。魚も香ばしい。「彩乃、お前を必ず現世に返す。だから、心配しなくていい」不意にかけられた言葉に、思わず箸を止めた。

「現世……あつ。えつ、もしかして、こういうのって食べちゃいけない系のやつ……？」

料理をほぼ完食しかけてから訊ねる。今さら感がある。

ミカゲは一拍おいて、ふっと表情を緩めた。

「大丈夫だ。ここは冥界ではない。——異界だ」

「……いまさらですが、その「異界」ってなんなんですか？」  
湯気を立てる汁椀をそっと置いて、彩乃は尋ねた。

「此岸と彼岸の——狭間にある世界だよ」

ミカゲは静かに答えながら、盃を軽く傾けた。

ほうと硬い顔で頷く彩乃にミカゲは苦笑をする。

「まあ、上位神たちにとっては、この異界はただの遊び場みたいなものさ」

拍売場やこの遊郭が盛況な理由が、少しだけわかったような気

がした。

「酒は呑めるか？」

「少しなら」

促されるまま横に腰を下ろす。これはお酌すべき場面かと手を伸ばすが、ミカゲがそれをそつと制した。かわりに、静かに盃へ酒を注いで差し出す。

盃を受け取り、口をつける。清酒の甘みが口いっぱいに広がり、飲み下した途端、身体の芯がふわりと温まる。

「これは神気を含ませた酒だ」

「ふあ……神気……？」

ぼんやりと返すうちに、氣づけばミカゲの腕に支えられていた。身体がゆるゆると溶けていくような感覚。思考もぼんやりしてくる。

「刻限までは、まだある。だが、早いに越したことはない」

「こくげん……って、なんれすかあ？」

「正当な手順以外で人の子が異界へ来た場合、こちらに留まるには契りが必要になる。その猶予のことだ」

「その猶予が切れちゃったら……わたし、どうなるんですか？」

「——消える」

「えっ……!? わたひ、消えちゃうの……?」

「そうならないために、これから契る」

ミカゲは盃をもう一度口元に運び、それを静かに口に含む。次の瞬間、彼が顔を近づけてくるのに気づいて、彩乃は思わず身を引いた。だが、すぐに顎を掬われ、向き直らされる。

「悪い夢だと思って、今は……我慢してくれ。現世に戻るときに、ここでの記憶はすべて消すから」

そう囁かれた瞬間、ミカゲの唇が重なり、甘い酒が口移しで流し込まれる。

「ん……♡ふ、あっ♡」

さきほどのものよりずっと濃く、熱い。喉を通った酒は、鼓動に乗って全身に広がっていく。

その熱に揺られながら、彩乃は思った。

——泣きそうな目をしてる。なんで、そんな顔するんだろう。力の抜けた彩乃を、ミカゲは軽々と抱き上げた。隣の間へと続く襖を滑らせると、そこには布団の敷かれた寝所が広がっていた。行灯が淡い光を灯し、室内をほんのりと照らしている。

「え、えっ……？　ち、契るって……」

言いかけた言葉に、ミカゲは小さく頷いた。

「すまない。他に方法がない。……配慮はする」

ふわりと、まるで壊れものに触れるように布団へと下ろされた。  
「彩乃、そう怯えなくていい」

ぎゅっと布団の敷布を掴んで身を硬くする彩乃の髪をそっと撫でる。掌から伝わる体温に、彩乃はほんの少しだけ息を吐いた。そのまま、ミカゲの唇が額に落ちる。やさしく、触れるだけの口づけ。そこから、首筋、鎖骨へと熱が降りていく。

「ひっ……ひゃん♡」

薄い皮膚に触れる唇と舌の感触に、身を振る。上擦った声が思わず漏れた。

「……神気のせいもあるとは思うが、敏感だな」

どこか揶揄うような声音。けれど、彩乃の耳には不思議といやらしさよりも、親しみが勝って聞こえた。恥ずかしさが募って、つい言い訳めいた声が出る。



「こんなっ……」

「いい、可愛い」

短く、やさしく遮られる。鼓動が跳ねて、耳の先まで熱が広がる。

ミカゲの手が帯に触れる。

ひとすじ、結び目が解けて布が緩んだ。するりと肩が頭になり、冷えた空気に肌が晒される。

掬うような手が、ふわりと胸に添えられた。柔らかな感触を愉しむように指先で撫でられる。

「あ、んっ……♡」

「大きいな。手に余る」

ぽつりと落とされた低い声が耳に残る。揺れる胸元を、重みごとと楽しむように掌が包み込む。

するりと、指の腹が乳輪の際を焦らすように撫でるたびに、彩乃の声が零れた。

「あう、んっ……んんっ♡♡」

「綺麗だな。薄い桜色だ」

「やあ♡そんな、あっ、あう♡恥ずかしい♡」

身体の芯がじんわりと熱くなる。与えられる刺激に、抗えない甘さが混ざる。羞恥と戸惑いが入り混じる。

ミカゲの手の動きはあくまでも優しく、でもどこか確信めいていてた。

「彩乃の身体は、どこも柔らかいな」

囁くような声音が耳に届く。ミカゲの手がそつと下肢へと滑り降り、内腿の滑らかな肌を撫でる。

「ひあっ♡みつ、ミカゲさま……！♡♡」

和装の下、彩乃の肌は無防備だった。柔らかく撫でる指先が、そのまま秘裂へと触れる。

くちゅと湿った音が、空気を震わせる。

自らがすでに昂ぶっていることを、彩乃は嫌でも思い知らされた。快感に膝が震える。指が形をなぞるたび、びくんと敏感な肉が跳ねた。

「やっ……♡やらあっ♡」

「こら、駄目だろう」

堪らず脚を閉じようとするが、膝裏の下に腕を入れられ脚を持ち上げられてしまう。無防備に秘所をミカゲの眼前に晒す。

「こ、こんな格好……♡♡」

身体を折り曲げられ、彩乃は自分の陰核が屹立している様を見せつけられた。愛液で濡れたミカゲの指先がそつとそこに触れる。

瞬間、彩乃の背がびくりと反り返った。声が喉の奥で引つかかるように掠れる。

「小粒だが、ちゃんと気持ちよくなれるようだな」  
包皮が優しく剥かれ、指の腹が敏感な部分をゆっくりと撫でるように扱う。普段は守られている粘膜への刺激はそれでも強すぎた。

「~~~~~♡」

快感に押し流され、声すら出ない。足指が自然ときゅつと丸まっていた。

「本当に彩乃は、可愛いな」

快感の余韻に浅く息を吐く彩乃の身体は、まだ僅かに震えていた。とろけきった脚の間は熱を帯び、陰核はじんじんと疼いたまま、余熱を宿している。

「男を夢中にさせる……そういう身体だ」

淡々とした声音で、しかしどこか熱を孕んだ響きが耳朶を打つ。その言葉に、彩乃の背筋がわずかに跳ねた。

「な……っ、や、やだ……♡そ、そんな……っ」

やめて、と言おうとした声は最後まで届かない。

「――生娘なのにな」

くちゆりと粘ついた音が響く。

ミカゲの指先が、彩乃の秘唇を左右に割り広げていた。晒されたそこが空気に触れ、羞恥と快感の火照りが一気に全身を駆け上がる。

「やあ……っ♡ひゃうっ……♡♡」

恥ずかしい、でも拒めない。逃げたいのに、どこにも逃げられない。

そんな彩乃の反応を見ながら、ミカゲの目は獣のように細められる。

「もっと見せてくれ」

「そ、そんなところ、み、見ないでください……」

「どうして？ 強請るように口を開け閉めしているのに」

期待するように愛液を零すそこ。膣穴にミカゲの指が軽く触れると、口付けるようにそれを食んだ。

つぶつとそのまま指が挿し入れられる。熱を帯びた襷をかき分け、奥へと入り込んでいく。

「……狭いな。でも、膣内も上手に吸い付いてくる」

内側から彩乃の意思とは無関係に、肉が指を逃すまいとするように蠢いた。

彩乃の胸が大きく上下し、熱い息がこぼれる。

「ひゃっ♡ミカゲさ、ま♡ら、らめえ……♡♡」

抗うような声は、恥ずかしさと快感に溶けてか細く揺れた。

「駄目じゃないだろう？」

問いかけるような声音に、彩乃は返事もできず首を振る。指は二本に増やされ、ずりずりと膣内を掻き混ぜるように出し入れされる。

「浅いところが善いみたいだな」

羞恥心と快感が入り混じり、彩乃は逃れようと腰を引く。だが、動けば動くほど自らミカゲの指に縋りつくような形になり、膣内でうねる褰が勝手に求めて締め付けてしまう。

「ひゃっ……♡そこだめ、ですっ♡♡気持ち、よすぎて♡あ、あうっ♡」

初めてなのに、こんなに感じてしまうなんて——恥ずかしくて、

怖くて、でももう止まらない。

「ああ……気持ちいいか」

溢れる蜜がとろとろと膣穴から零れる。響く水音が余計に彩乃を熱くさせる。

「ほら、もうこれだけ濡れていれば——」

囁く声が降ってくる。彩乃の目の前に、愛液でてらてらと光る指先が突き出される。

ミカゲの指に絡みつくその淫らな粘液。自分の浅ましさを見せつけられているようで、目を逸らしたいのにそれができない。

膝裏から腕が抜かれ、彩乃の脚が布団の上に降ろされる。ミカゲが自分の着物を寛げ、そこから赤黒い陰茎が覗く。

「ひっ——」

ミカゲの作り物めいた白磁の美貌と不釣り合いなグロテスク



さ。なによりまだ完全に勃ち上がっていないというのに、大きい。

そのまま、ミカゲが覆いかぶさるように近づいた。

熱を持った先端が濡れた秘所に触れる。

「そ、そんなの挿入らないです……！」

「——彩乃、大丈夫だから」

名前を呼ばれ、金色の双眸に見つめられる。抗うことも、逸らすこともできず、彩乃はただその視線に囚われる。

添えられた手のひらにそっと指を絡める。その瞬間、ミカゲの身体がさらに近づいた。膣口に押し当てられた熱が、ぬるりと少しずつ中へと侵入してくる。

「あっ♡おふっ……♡ミカゲさまの♡挿入って……♡」

じわじわと押し広げられる圧迫感に、彩乃は眉を寄せる。痛みではない。けれど、自分の中が形を変えてミカゲを迎え入れている。

くのがわかって、頭が真っ白になる。

「もう少し力を抜いて」

耳元で囁かれた声はひどく優しく、その優しさに甘えるように、彩乃はふーふーと呼吸を整えた。

じんわりと、膣奥まで熱が届く。きゅうと奥が反射的に収縮し、ミカゲのモノをきつく締め付ける。

「ちゃんと全部挿入った」

「あ……♡あ、あぐ……♡」

身体の芯がとろけていくような快感に、彩乃の意識は遠のきそうになる。

「彩乃……お前の中、とろとろで……心地がいい」

囁かれる声に、ただこくりと頷くことしかできなかった。絡めた指に力を込めると、それに応えるように、ミカゲの腰がゆつく

りと動き始める。

とちゅとちゅと、静かに最奥の子宮を押し上げられる感覚。深く、深く――まるで彩乃の身体に、想いを刻みつけるかのような律動。

「ぶづっ♡ぶづっ♡」

漏れ出す声は、自分でも抑えようがなかった。自然と、獣じみた声が喉から零れてしまう。

ゆっくりと動き始めたミカゲの腰が、彩乃の内側を擦りあげていく。くちゅ、ぬちゅと蜜の混じった水音が二人の間に満ちていく。

「ぶづっ♡……やあ、ミカゲさまあ……っ♡」

彩乃の声はすぐに涙ぐんだように震えた。羞恥と熱、そして心の奥に満ちる想いが複雑に絡み合って、ただ喘ぎとなって零れて

しまう。

「彩乃……」

囁くように名を呼びながら、ミカゲは彩乃の頬に唇を落とす。優しい口づけが何度も頬をなぞり、瞼の縁を撫でる。

動きは次第に深く、強くなっていく。彩乃の内壁はうねるようにミカゲのモノに絡みつき、吐息がますます熱を帯びていく。

「ひゃっ♡アッ♡♡だめっ、そんなにしたら……♡」

「嫌か？」

問いかけは低く、けれどどこか怖いほどに真摯だった。彩乃は必死に首を振る。

「いや、じゃ……ないっ……♡」

その答えを聞いた瞬間、ミカゲの動きが一段と強まった。ぐちゅぐちゅと膣奥を叩くたび、彩乃の腰が揺れる。

「——そうか」

どこか切なさを滲ませた声。そう言ったミカゲの顔は、泣き出しそうに歪んで見えた。彩乃は思わず絡めた指を解いて、その頬に触れた。

ミカゲは目を細め、彩乃の手に静かに口づけた。

湿った音を立てながら、ミカゲの腰が彩乃の奥深くを満たしていく。その律動は激しく彩乃はただ揺さぶられていた。

「ふぁっ……♡あうっ♡……ミカゲさまぁ……っ♡」

淫靡な声が、止めようもなく零れ落ちる。膣壁は熱を帯び、まるで逃すまいと吸い付くように締めつけている。肌が重なるたび、二人の間にこもった熱が空気を震わせた。

「……彩乃、感じてくれているんだな」

低く囁かれた声に、彩乃は思わず顔を背けた。けれどすぐに顎

をそっと掬われ、金色の瞳に視線を絡め取られる。

「見せてくれ。お前の全部を俺に」

その一言に、力なく頷くしかできなかった。その瞬間、ミカゲの動きがさらに深く、鋭くなる。痺れるような快感が全身を駆け抜ける。

「んあっ♡♡あっ♡……も、もうだめですうっ……♡♡」

限界が近づくのがわかる。彩乃の膣がきゅうと収縮を強め、ミカゲのものを貪欲に搾り取ろうとする。

ミカゲの表情がわずかに歪み、息が詰まったように言葉を吐く。  
「……ッ！」

びくんと痙攣するように跳ねた二人の身体。どくどくと熱いものが注がれる感覚に、彩乃は何も言えず、ただ身を震わせる。

絡めた指先だけが、まだ熱を帯びたまま、しつかりと互いを繋

いでいた。